

発問について

発問の良否は、1時間の学習の流れを左右するばかりでなく、やがては教師と子どもとの相互信頼にも発展する大切なことである。発問は、授業場面によっていろいろ区別されるが、基本となる発問の考え方は、共通している。

1. 指導のねらいにあった発問であること

教材のその単元での指導目的をはっきりつかみ、指導のねらいをきちんと決めること。それによって導入の発問を考えること。指導のねらいのよって発問は、かわる。
導入の発問によって、その時間の課題を子どもたちが、つかまえる事ができなければならない。

2. 子どもの反応に即した発問であること

子どもの考えをよく聴き、子どもの反応に即しながら、教師の考えた方向にどう接近させるか柔軟に考えた発問をしていかなければならない。子どもの発言によって発問は、かわる。

3. 子どもの思考を助長するための発問であること

授業の主体を子どもたちのものとするために、子どもの思考を助長しながら、子どもの活発なよい発言を引き出していく教師の発問であるべき。教師の発問の「助詞」一つで子どもの反応は変わる。

4. 発問と指導を混同しないこと

発問：既習の学習の上に立つべきもの。考えを問いかけるもの。
指導：知識や理解、技能を教えること。例えば、新しい漢字や用語など。

5. 発問と対話を混同しないこと

発問：全体思考が対象。全ての子どもたちを高めるためのもの。
対話：個人を対象。数人の子どもたちとの話し合い。

6. 発問と発言を混同しないこと

発問：子どもの考えをつないでいく。
発言：子どもの思考が中断したり、子どもの学習意欲を阻害したりする。

7. 発問と質問を混同しないこと

発問：見方や考え方を問う問いかけ
質問：答えを求める問いかけ

授業の始めには、子どもが授業全体の見通しが持てるような発問をしよう。

接続語を使って、子どもの発言や考えをつないでいく発問をしよう。

子どもの発言は、復唱しないで、いったん消化して教師の意図を加味して全体に返そう。

算数の時間に使ってみたい発問

授業の場面	発問	問いかけ
1. 問題把握	どんなことについて学習するのだろう。 何について調べたいですか。 今日は、どんなことがわかればいいのでしょうか。	課題の把握 問題の把握
	何がわかっていますか。 何がわかればいいのでしょうか。 気になるところはありませんか。	解決の糸口
	どうなりそうですか。 見通しは立ちましたか。 いくらぐらいになりそうですか。 どんな考え方が使えそうですか。	予想 見通し 見積もり
2. 自力解決	特別な場合で考えてみよう。 考え易い形は、ないですか。	特殊化
	共通していることはないかな？ 何か同じことが隠れていないかな？	解決の糸口
	前に似たことはなかったかな？ 知っていることで使えそうな考え方はないかな？	類推
	数をいろいろ変えてみたらどうだろう。 数を簡単な数に置き換えてみてはどうだろう。	単純化
	関係を絵や図にかいてみよう。 わかり易く絵か図か表に整理できないかな？	数量化 記号化 図式化 図形化
	解決のためには、何がわかればいいのだろうか？	解決の糸口
	本当にそういえるのでしょうか。	確認 再考
	もっと簡単にならないかな？ もっとわかり易くできないかな？	簡略化 一般化 統合化
	他の考え方は、ないかな？ 他の解き方は、ないかな？	多様化
3. 学び合い	どこがすばらしいですか。 自分の考えより優れているところはどこでしょう。	お互いに認め合う
	自分の考えや方法と比較して意見を述べてみよう。	比較
	すっきりしているね。 わかり易いね。 簡単でわかり易いね。 ていねいだね。 よくわかるね。	評価
	理屈に合っていますか。 まちがいはないですか。 付け加えはありませんか。 それぞれのよいところが見つかりましたか。	相互評価
4. まとめ	結果は、どうになりましたか。 どんな考え方を使ったのでしょうか。 共通している考え方は、何でしょう。 まとめるとどんなことが言えますか。 結論としてどんなことが言えますか。 今日は、どんなことがわかったと言えますか。	結論 自己評価
	わかったことをいろいろな場面に使ってみよう。	拡張 発展
	今度は、どんな学習がしたいですか。 今度は、どんな問題を解決したいですか。 今度は、どんなことを知りたいですか。	次時への展望

発問について（文部科学省）

1. 発問の要件

- 1.何を問うているのかがはっきりしていること。
- 2.簡潔に問うこと。
- 3.平易な言葉で問うこと。
- 4.主要な発問は、準備段階で「決定稿」にしておくこと。

2. “ゆさぶる発問”

- 1.広義には、子ども達の学習に変化をもたらす緊張を誘う発問のこと。
- 2.狭義には、子ども達の思考や認識に疑念を呈したり混乱を引き起こすことによってより確かな見方へと導く発問のこと。

例 「桃太郎は、血も涙もない人間で、欲張りな人ですね。」

→子ども達は、あらためて桃太郎の人間像を考える。

例 「この段落の要旨は、…ですね。」（選択肢の中の誤答にあたるものを提示する。）

→子ども達は、その段落の内容を思い出して要旨を確認する。また、以降の段落を注意深く読むようになる。

3. 「質問」か「発問」か

1. 簡略な定義

- ・「質問」は子供が本文を見ればわかるもの。
- ・「発問」は子供の思考・認識過程を経るもの。

2. 学年や場面によっては「質問」によって確認することが必要な場合もあるが、そればかりだと学習意欲を低下させる。
3. 一問一答とならず、子ども達の間でも関連発問がでるとよい（ピンポン型よりバレーボール型）。
4. 答えが「はい・いいえ」「そうです・ちがいます。」とだけにならないようにする。

問 い か け	応 答	考 察
桃太郎は、鬼ヶ島へ鬼退治に行ったのですか。	はい	子どもの考える余地がない。
桃太郎はどこへいったのですか？ 鬼ヶ島へ何をしに行ったのですか？	鬼ヶ島へ。 鬼退治に。	一問一答で終わる。 本文を見ればわかる。
桃太郎は何をしましたか？ 桃太郎は、どのように鬼を退治しましたか？	鬼ヶ島の鬼を退治した。 犬と猿と雉と力を合わせて。	桃太郎の行動を子どもたちが自分の言葉でまとめている。
どんなお話ですか？	桃太郎が、犬と猿と雉と力を合わせて鬼ヶ島の鬼を退治した話。	「力を合わせて」という内容価値とともに、あらすじも述べている。